

形故稱奥之富士。

ふじみすはふじとやいはん陸奥のいばきの嶽をそれと詠ん

〔東遊雜記十二〕岩城山は、弘前より麓まで二里半八丁、夫より頂に登る所曲道の坂三里、四季に雪ありといへども、此節殘暑強くして雪なし、岩城山に權現と稱す、小社あり、祭神詳ならず、○中略

世に風景を好む人、まゝ多き中に、そのよる所予が好む所と大ひに異なり、既に藝州嚴島を、日本の三景に撰びて絶景の地とす、いかにも潮入江々々にさしいれし、風景いわむかたなく、月夜などの景色、婦人などの目には贍を消す所なり、然れども境内狭く、面前に地の御前といふ所、さてよき眺望更になしたとへて云ば、一向宗の佛間のごとく、社塔を取除なば、何國にても數多ある風景の地なり、三景の其ひとつに撰びし事、世人誤るものか、岩城山は奇麗なる事も、美々敷所もあらざれども、山の形粗駿州の富士のごとく、白雲峯を包みし時は、其詠一ならず、眺望せる事日日にかわりて、風景のかぎりなし、嚴島などの及ぶ所にはあらず、かゝる勝景にても、所もあしく、好む所によりて、世に歌われざるもの、人の世にしられざるがごとし、

〔東國旅行談五〕岩木山

奥州津輕弘前の御城下より、五里西の方に見ゆる高山なり、四季ともに雪とけず、眺ある山なれば、詩歌連誹の遊人、これを賞美して津輕富士といふ、風景をもとめて、野邊に遊観する人おほし、されども常には此山に登る事を許さず、八月朔日にのみ、山にのぼる事を許す、何人か讀ける歌に、

富士見ても富士とやいはん陸奥の岩木の山の雪の曙

此うたは餘ほど古き歌なるにや、國中にて賤き者までもよくおぼへて、我等が如き旅人に物がたるゆへこゝに書しるしぬ、